

# 海気通信

## 稲毛むかしばなし

### 稲毛なのに「袖ヶ浦」？

現在のようにカメラが一般家庭に普及する昭和40年頃まで、主に観光地などでお土産として販売されていた絵葉書は、現在では当時の景色や文化を今に伝える貴重な資料となっています。

写真を元にした絵葉書には、多くの場合地名やタイトル、発行元が記されているのですが、稲毛が写された絵葉書の多くに「袖ヶ浦」の文字が。「袖ヶ浦」と聞くと袖ヶ浦市や習志野市・袖ヶ浦が思い浮かびますが、なぜ稲毛の絵葉書に書かれているのでしょうか。その謎に迫ります！



望眺の岸海毛稲・浦ヶ袖

①絵葉書《袖ヶ浦 稲毛海岸の眺望》(明治後期～昭和初期) 個人蔵

19号  
2026/4/1  
発行

千葉市民ギャラリー・いなげ  
〒263-0034  
千葉市稲毛区  
稲毛 1-8-35  
TEL:043-248-8723  
FAX:043-242-0729

https://galleryimage.jp/



②東京鉄道局発行《房総一周》個人蔵 (画像は一部)  
昭和初期頃発行の観光パンフレット。『稲毛』『千葉』『八幡宿』『姉ヶ崎』の海岸にかけての袖ヶ浦は、波の静かな遠浅の海で…』と書かれている。

## 悲しき伝説の地

袖ヶ浦の地名は、日本最古の国家による書物「古事記」(712)や「日本書記」(720)に出てくる話に由来します。

景行天皇の息子・ヤマトタケルノミコトが東国を征服するために遠征に向かうと、相模国(神奈川県)から東京湾を渡る際、暴風雨に遭い船が進めなくなってしまう。そこで、妃のオトタチバナヒメが海に身を投じ、海神の怒りを鎮めたことで、無事に船が岸にたどり着きました。後日、オトタチバナヒメの袖や櫛が海岸に流れつき、それを発見したヤマトタケルノミコトは、悲しみの中「君さらず袖しが浦に立つ波のその面影をみるぞ悲しき」と歌を詠みました。

その「袖しが浦」が転じて、東京湾の千葉県側海岸一帯を「袖ヶ浦」と呼ぶようになったといわれています。なお「君さらず」が転じて「木更津」の地名となったともいわれています。その他にも、この伝説に関する地名は、東京湾沿いの各地に残されています。

## 稲毛の名字や屋号の話

稲毛のムラのおこりは現在の稲毛町5丁目の「本郷通り」とよばれるあたりで、元々小中台に住んでいた人々が移住してきたといわれています。本郷通りを歩くと「川島」「海宝」「植草」などの旧家の苗字を多く見かけますが、小中台地区にも「海宝」さんが多いそうです。現在でも親戚として付き合いが続いている家もあれば、数えきれないほど親戚がいる為に、分家していく過程で縁が分からなくなってしまう家もあるのだとか。『稲毛小学校創立100周年記念誌(昭和48年)』によると、明治4年(1871)平民が自由になった際、川島40戸、海宝20戸、植草12戸、並木11戸、大越7戸、平木6戸、中村5戸、大野5戸、布施3戸、花光1戸、鳥飼1戸など125戸が稲毛に暮らしていたと記録されています。

その後、稲毛中学校の生徒が地域について調査した『稲毛十話(平成2年)』では、川島127戸、海宝45戸、佐藤38戸、鈴木35戸、齊藤29戸、渡辺28戸と記されており、元々多かった川島さんが、平成にかけてさらに増えたことがわかります。「稲毛お話し会」に参加してくださった稲毛出身在住の川島恵子さんは、子どもの頃、日本で一番多い苗字は川島だと思っていたそうです。また「稲毛十話」を編纂したクラスの前担任教員、伊藤芳仁さんが教室で川島さんと呼ぶと、たくさん川島さんが振り返ったのだとか。



③美浜区・稲岸公園内「礎」の碑  
稲毛海岸の埋立によって稲毛町漁業協同組合が昭和44年(1969)に解散した際に建てられたもの。碑の裏側には解散当時の組合員名が刻まれており、「川島」や「海宝」などの旧家の苗字が多いことが見てとれる。

そのような同じ苗字の皆さんは、普段は名前やニックネームで呼び合うことが多かったのですが、他の家族などを表す場合には「屋号」を使用しました。屋号とは、他の家族と混同しないように付けた呼称で、先祖の名前から「〇〇兵衛」や「〇〇衛門」と呼んだり、家の職業から「〇〇屋」や「〇〇店」などと呼んでいました。現在では、この屋号もだんだんと使われなくなっているそうです。

## 日本の植物分類学の父、 牧野富太郎が稲毛に！



④牧野富太郎《千葉 稲毛にて》  
(昭和16年9月28日)  
高知県立牧野植物園提供

日本の植物分類学の基礎を築き、NHK朝の連続テレビ小説「らんまん」としてドラマにもなった牧野富太郎博士が稲毛でも植物採集を行っていたことがわかりました。高知県立牧野植物園発行「牧野富太郎植物採集行動録 昭和篇」によると、日付は昭和16年(1941)9月28日、博士が79歳の時です。「曇。東京植物同好会会員と稲毛千葉県市へ行く。百人許り集ル。海辺方面其内面辺を採集す。」と書かれており、著名な博士のもとに多くの人々が集まったことが伺えます。伊藤芳仁さんは、稲毛に古くから住む義父の川島一さんより「額田病院の坂上や浅間神社の林に植物学者が来た」という話を聞いたことがあったそうです。他にも情報をお持ちの方がいましたら、ぜひご連絡をお待ちしています！

●本号は西川明氏(元千葉市史編纂委員)と伊藤芳仁氏(千葉市中学校教員)を迎え開催した「いなげお話し会」の一環として「稲毛小学校創立100周年記念誌(1973)稲毛中学校発行稲毛十話」(2008)高知県立牧野植物園発行「牧野富太郎植物採集行動録 昭和篇」(2005) p.162 (山本正江・田中伸幸・編)の内容を元に編集しました。●画像④は、高知県立牧野植物園よりご提供いただきました。皆様ご協力ありがとうございました。